

2025 年 8 月 11 日

内閣総理大臣 石破 茂 様

全国キリスト教学校人権教育研究協議会

## 沖縄に対する差別政策を改め、平和を発信してください

アジア・太平洋戦争末期、正規軍による地上戦が終結したとされる 6 月 23 日、沖縄は今年も慰霊の日を迎えました。戦場、戦争体験者のほとんどが世を去っていかれる今、高齢者と共に「平和の碑」に手を合わせる子どもたちの姿が報道されています。追悼式で「おばあちゃんの歌」を朗読した城間一步輝(いぶき)さんは詩の中に、祖母が一步輝さんのほほを触りながら語った「生き延びたくとう めちぬ ちるがたん 生き延びたから、命がつながったんだね」という言葉を刻んでいます。沖縄では、地上戦の記憶、そこから学び取った「ぬちどうたから」(いのちこそたから)の思いが世代をつないで脈々と流れていることを感じさせられます。

しかし今年もまた国会議員による許しがたい暴言が沖縄に向けられました。西田昌司参議院議員が「ひめゆり学徒隊」の説明について、「日本軍がどんどん入ってきてひめゆり隊が死ぬことになり、アメリカが入ってきて沖縄が解放されたという文脈で書いてある。歴史を書き換えるとかいうことになってしまう」と発言、県民からの厳しい批判により「ひめゆりの塔の名前を出したことは不適切だった」と謝罪しましたが、発言内容そのものに対する謝罪にはなっていません。

これは一議員の問題ではなく、この国の中に、一方で脈々と続いている沖縄への無知、無関心、それによる差別意識から出た言葉と言わねばなりません。

また伊東沖縄・北方担当大臣は記者会見で(謝罪したと聞き)「まずは一段落でよかった」と語りました。「一段落」という表現に大変な軽さを感じます。大臣は「沖縄の地上戦の歴史を心に刻みながら、沖縄の振興に引き続き取り組んでいきたい」とも語りました。歴史を心に刻むなら、国土総面積の0, 6パーセントの沖縄に米軍基地7割以上を押し付けて住民を苦しめるのではなく、また、基地があるがゆえの米軍の犯罪、環境汚染に対し手をこまねくのではなく、この植民地状態を変えるために働くべきです。

西田議員は、20 年前のあいまいな記憶に基づいた思い込みを持論として展開したわけですが、このような言動による誤った情報が今の日本社会、とりわけネット空間に蔓延していることも大変憂慮されます。追悼式で首相は「住民を巻き込んだ凄惨な地上戦が行われ、20 万人もの尊い命が失われました」と人ごとのように語りました。本来は「国家の政策により住民を巻き込む凄惨な地上戦を引き起こし、20 万人もの尊い命を奪いました」と明確に戦争責任を

認め、沖縄県民の心身に刻み込まれた記憶と長年の研究成果に基づいた歴史認識を学び、政府として共有することが必要です。

しかし政府は、「中国の脅威」「台湾有事」を喧伝し、奄美から八重山に至る南西諸島に自衛隊と敵基地を先制攻撃できるミサイルを配備し、戦争体制を強化しています。臨戦態勢においては偶発的な衝突が大規模な戦争へと拡大していきます。いったん戦争が始まれば、その最前線に立たされるのは沖縄をはじめとする南西諸島です。私たちは、徹底抗戦を叫び「沖縄戦」を強行し、そのわずか数か月後に無条件降伏を受け容れた、沖縄に対する裏切りと差別の歴史を忘れることはできません。

世界では今多くの戦争が続いています。その流れに加わり戦争を準備するのではなく、沖縄差別の政策を転換し、平和を発信していくことを強く求めます。

<連絡先> 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-21

日本キリスト教協議会(NCC)教育部

E-mail: nccjedu@gmail.com